【資料１】

小田原市こども・若者施策会議　プロジェクト分科会　令和9年3月



「声」を集めるヒント集

～こども・若者から意見が集まらないことはありませんか？～



01.ヒント集作成の目的

02.実践概要・報告

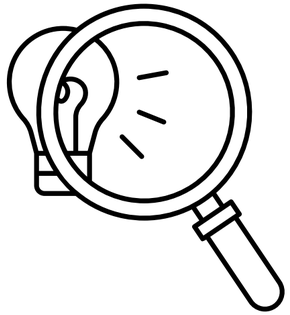
03.関心を持ってもらうには

04.回答しやすくするには

05.より深く知るには

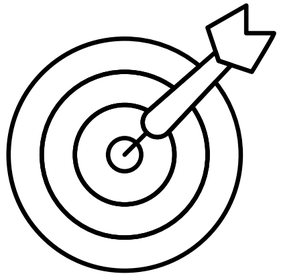
06.その他の提案

1.ヒント集作成の目的



現状課題

こども基本法の制定により、こども施策を進めるうえで、こども・若者の意見を収集することが重要となった。しかし、小田原市こども計画策定時のアンケート調査では回答率が低く、こども・若者の声を十分に把握できていない状況が明らかになった。
「声を出すことへのイメージが持てていない」「関心が表面化していない」「地域やまちづくりに関心を持ちながらも意見を伝えるきっかけが無い」といったこども・若者たちの声を、行政が収集する仕組みづくりが課題となっている。



声を聴けていないこども・若者からの「声」を集めるためのアプローチと、より多くの意見を収集する方法を提案し、今後のこども・若者関連施策の充実につなげることを目的とする。

※なお、意見を表明しづらい方々（引きこもり、不登校、障害を持たれている方など）に対しても有効と考える。

2.実践概要・報告

実践概要

- 日時：令和8年6月14日　13時～15時半
- 会場：おだわら市民交流センターUMECO会議室4
- 内容：当ヒント集を作成するため、デジタルを用いた意見収集の方法、対面による意見収集の方法の2事例についてのワークショップを行った。
- 用意したもの：テーブル、椅子、ホワイトボード、名札、お菓子、飲み物、模造紙、ポストイット、マーカー、ペン、タイマー、レコーダー

参加者情報



当日のワークショップの流れ

- 自己紹介
- アイスブレイク

≫

ワークショップ開催に至る経緯についての説明

≫

ワークショップ
- 事例1：デジタルによる意見収集について
- 事例2：対面による意見収集について

≫

- 振り返り
- まとめ

実践を終えて（参加者の声から抜粋）

- 自分たちの意見が何かに反映されるという感覚はとても面白いと思った。
- 自分たちが今日話し合った内容や意識が広がり、もっと多くの人に共有できるようになることを期待する。
- 自分の役割感や効力感を何らかの形で持つことで、まちづくりなどに積極的に関わりたいと思う意識が生まれることを実感した。

実践を終えて（事務局等の声から抜粋）

- 皆さんの意見がとても心に刺さった。これまでの市役所のアンケートは一方通行的なものが多かったと思い、反省している。
- より「市民と市役所が一緒にまちをつくる」という形にしていけるよう、意識改革を進めたいと思う。
- 無関心と捉えるのではなく、行政がもう少し市民に近づき敬意を示すところが必要だと思いました。

3.関心を持ってもらうためには：きっかけ・自分事化・認知向上

ねらい　若者にアンケートに興味を持ってもらい、主体的に参加してもらいたい

のに…

こども・若者の声

- 回答が、地域の改善に役立つという関係性が理解されていない
- 若者が市の施策に興味を持っていない
- 若者が使い慣れているツール（例：LINE、SNS）やカジュアルなデザインを採用していない
- 質問内容が堅苦しく「役所らしい」印象が強く親しみを感じない
- 回答フォームが分かりづらいまたは、質問項目が多すぎる

それなら…

こうしてみたら？

1. 事前の関心醸成と認知度向上
2. 「自分事」として捉えてもらう工夫
3. 楽しさや報酬による「きっかけづくり」

3.関心を持ってもらうためには：きっかけ・自分事化・認知向上

こうしてみたら？ の詳細



1. 事前の関心醸成と認知度向上

- アンケートを実施する前に、そもそも市の取り組みに関心を持ってもらう。
- 学校教育（授業）と連携して授業内で取り扱い、アンケートの認知度向上につなげる。



2.「自分事」として捉えてもらう工夫

- 冒頭で、文字及び、イラストや写真などの視覚的要素を用いてアンケートの目的やまちづくりのイメージをシンプルかつ明確に提示。
- アンケートの目的や回答する意義、さらに「回答が地域の改善に役立つ」という関係性をしっかりと伝える。
- 若者自身が「自分のアンケート1枚が何かに変わるかもしれない」「自分の意見が反映される」という役割感や効力感を持つことが、関心を引き出す非常に重要なきっかけになる。



3. 楽しさや報酬による「きっかけづくり」

- アンケートをより多くの人に知ってもらい、回答してもらうきっかけとして、若者向けの魅力的な報酬や景品の導入。
- アンケート回答後にプロの写真家が撮影してくれたり、福引券と交換できたりするような「楽しい要素」や、インタビュー形式による興味を引く仕掛けも効果的。

4.回答しやすくするには：心理的・物理的ハードルの解消

ねらい　回答時の煩わしさや難しさを感じず、スムーズに回答してもらいたい

のに…

こども・若者の声

- 質問内容が堅苦しく「役所らしい」印象が強く親しみを感じない
- 信憑性や安心感に欠ける印象がある
- 若者が使い慣れているツール（例：LINE、SNS）やカジュアルなデザインを採用していない
- 最初から難しい質問があったり文字量が多いとアンケートからの離脱率が高まる
- 回答フォームが分かりづらいまたは、質問項目が多すぎる

※こども・若者の声には重複しているものがあります。

それなら…

こうしてみたら？

1. アンケートデザインの刷新
2. 物理的な負担の軽減
3. 若者が使い慣れているツールの活用
4. 質問内容のスリム化と適切な難易度

4.回答しやすくするには：心理的・物理的ハードルの解消

こうしてみたら？ の詳細

1. アンケートデザインの刷新

- 市役所らしい堅苦しいデザインや印象を払拭し、イラストやビジュアルを盛り込んだ柔らかく、カジュアルなデザインを採用
- 一方で、市役所らしさを上手く活用できれば、アンケートの信頼性が増し手に取ってもらいやすくなるという視点もある。

2. 物理的な負担の軽減

- イベント等で用紙を配る方法は持ち物が増えて煩わしいため、二次元バーコードの活用を進める。
- また、ボード上の共感できる意見にシールを貼る「シール投票」のような簡単な回答方法も効果的。

3. 若者が使い慣れているツールの活用

- 従来のWEB回答フォームだけでなく、若者が日常的に使い慣れているLINEやSNSなどの回答フォーマットを活用することが有効。

4. 質問内容のスリム化と適切な難易度

- 文字量や設問数を減らし、簡潔で答えやすい質問内容にする。
- 最初から難しい質問があったり文字量が多かったりすると離脱率が高まるため、質問数を少なくして複数回に分けて実施する。

5.より深く知るためには：回答の質の確保と深い関わり

ねらい　単なる回答数の確保に留まらず、若者の本音や質の高い意見を収集したい

のに…

こども・若者の声

- 回答が、地域の改善に役立つという関係性が理解されていない
- 信憑性や安心感に欠ける印象がある
- アンケートの目的や回答する意義が明確に伝わってこない
- 質問内容が堅苦しく「役所らしい」印象が強く親しみを感じない
- 回答フォームが分かりづらいまたは、質問項目が多すぎる

※こども・若者の声には重複しているものがあります。

それなら…

こうしてみたら？

1. 意見が活かされる達成感の付与
2. 慎重な報酬・景品設計
3. 「2構成」による動機付けと質の確保

5.より深く知るためには：回答の質の確保と深い関わり

こうしてみたら？ の詳細

1. 意見が活かされる達成感の付与

- 自分が提案した内容が実際に反映されたり活かされたりするかもしれないと思える「達成感」や、社会に対して影響力を行使しているという実感が、より積極的かつ深い関わり（まちづくりへの主体的参画）を引き出すことにつながる。

2. 慎重な報酬・景品設計

- 報酬や景品を重視しすぎると、適当な回答が増えたり、動機付けに偏りが発生したりして回答の質が低下する懸念があるため、慎重な設計が必要。

3.「2構成」による動機付けと質の確保

- 報酬をきっかけとして「多くの人に知ってもらい回答してもらう仕組み（分母の確保）」と、ワークショップなど「関心を持った人がさらに深く回答できる仕組み（質の確保）」の2つの構成を組み合わせる設計が推奨される。

6.その他の提案 ： 実施環境・手法、定期的な対話の場、行政の姿勢



実施シチュエーション と時期の検討

- その場と関係のない、場違いなシチュエーションでのアンケート実施は避けるべきである。
- アンケートの実施時期は、学校行事や共通テストなどの時期とずらすことで、より目に入りやすく、回答しやすくなる。



対話の場の 定期開催への期待

- 「自分の意見が反映される感覚の面白さ」や「他の人の意見を聞く体験」自体が非常に良い体験であり、意識改革のきっかけとなるため、こうしたワークショップのような意見交換の場を定期開催してほしいという強い要望がある。



行政側の 意識改革と姿勢

- これまでの市役所のアンケートは一方通行的なものが多かったという反省がある。若者が無関心なのではなく、行政側が市民に近づき敬意を示し、「市民と市役所が一緒にまちをつくる」という形に向けて意識改革を進めることが求められている。



こども・若者は、施策の「対象」ではなく、ともにつくる仲間です。

ともにつくる仲間の声を聴くためには、声を届けやすい入口が必要です。
わかりやすく尋ねること。
気軽に答えられる方法を選ぶこと。
安心して話せる場をつくること。
こうした工夫が、こども・若者の「言ってみよう」という思いを後押しします。

次の意見収集で何を一つ変えられるでしょうか。
小さな工夫の積み重ねが、これまで届きにくかった声を、
まちの未来へつなげていくと考えます。



委員名簿

氏名	団体等
竹内 董	一般社団法人FROM PROJECT 代表理事 （小田原市こども・若者施策会議 プロジェクト分科会長）
鈴木 乙葉	小田原市ユース・リーダーズ・クラブ
小久保 鈴菜	小田原市保育所保護者会連絡協議会 元監事
隅田 裕美	公募市民
益田 麻衣子	小田原市教育委員会委員 教育長職務代理者
増田 房子	児童発達支援センター

※本ヒント集は、小田原市こども・若者施策会議のプロジェクト分科会にて検討・制作されたものです。

事務局名簿

小田原市子ども若者部　子ども政策課

副部長 子ども政策課長事務取扱	田村　直美
子ども政策係長	菅野　敬志
青少年育成係長	吉村　真悠子
主査	相原　裕子